六塞室《むそくべや》

高居望

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
六塞室（むそくべや）

【Ｎコード】
Ｎ６８５２Ｚ

【作者名】
高居望

【あらすじ】
――現状を把握する、それは確かに大事だ。でも順序が違う。もっと先にすることがある

――彼は焦りとサボタージュは同程度の罪であると考えていた

――そろそろ核心に迫りますが

知らない場所に互いを知らない六人。だれがどうしてこんなこと

をしたのか……　次々と押し寄せる展開に六人はただ流されるだけなのか……　それとも……

序

一日を文字に置き換えたらどれくらいだろう？　そう問われたらなんて返すだろう。

俺だったらこう即答する。「それはもちろん、漢字で二文字、ひらがななら四文字」だと。「ローマ字なら七文字かな」なんて付け加えてもいい。その他諸外国の言葉で表せばひょっとしたら十文字ぐらいは越えるのかもしれないが、それはくどいだろう。面白いものは好きだけど、くどいものは嫌いだ。

おっと失礼、気を悪くしたかな。こんなものはとるに足らない、言うならば本題に入る前の冗談ってやつだ。俺としてはメインに移る前の出だしってやつは、こういうとんちめいたものがふさわしいと思うのだけど、それはあくまで俺の考え。そうは思わない人もいるだろうし、また僕はそういう存在を認める心を持っているということを示すために、前置きはこれくらいにしておこうか。なんて、本当にそう思っているのなら出だしを言い直すべきなのだろうが、それはしない。なんだかんだで、この言い回しが気に入っているからだ。いつか別の場所でも使うかもしれない。

っと失礼、話がそれた。では本題。ここからは聞き流さないでほしい。

一日で起きたこと、感じたこと、それを読んだ人が作者の一日を理解できるような話を書いたら、いったい何文字に相当する？　そう聞かれたらなんて答えるだろう。いったん目を閉じて考えてみてくれ。

自分なりの意見を持って、それと俺の持論を比べてみてほしい。それじゃあ、その持論を話そうか。

俺なら「それは人による」だ。ここで三八文字なんていう輩がい

たら、そいつには笑いのセンスがない。さっきと同じネタだし、何より本当に三八文字か確認するのに手間がかかる。一、二、三……と、なるほど三八文字だ。そんな発言をしておいて文字数が違ったら笑ってやろうと思っていたけど、数え上げぐらいはできていたか。というより、そもそもそんな発言をしたやつが俺の妄想上の人物なのだから、まったく意味のない話だった。

人によって違う。それに戻るけど、本当にその通りだろう。そんな答えがあるものか、と思う人には逆に問いたい。それなら、何文字なのかと。

人によって違う。個人の世界を見る目によって大きく作用するだろうし、さらに言えば、起きた出来事をどの程度正確に表現するかでもかなり変動する。それこそ桁が変わるだろう。

朝起きて夜寝ました。で終わらせる人だっているのかもしれない。俺としては、そんな人には次の朝が来ないことを切に願うけど。そんな文字を読ませた作者を呪うだろうけど。

本題と言いつつわき道にそれる。そんなさりげない悪ふざけもそろそろよそう。これは俺がふざけるために語っているんじゃなくて、君に聞いてもらうためのものなのだから。俺だけが楽しんでも仕方がない。

肝心なのは俺の場合だ。散々君に問うてみたが、結局のところ俺の話を聞かせる前不利に過ぎなかったのだ。

俺の一日の場合、俺の十二月二十四日の場合、俺が自分で書いた場合。今大切なのはそれだけ。

余計なことを言い出して君をうんざりさないうちに答えてしまおう。それはきっと、本一冊分にはなるんじゃないかなと思う。たぶんそうだろうな、と思う。

どうしてそんなに自信なさそうに言うのかって？　それは……これを聞いて君が続きを聞く気をなくすかもしれないから、できれば黙っておきたかったのだけれど。聞かれてしまったなら仕方がない、せめて誠意が伝わるように答えるとしよう。

それは、俺もまだ数えたことがないからだ。なんていったって、これから語る話自体も、今君に初めて話すつもりなのだから。出来立てどころか、未完成品とも言えない、未創作品とでも言うものだ。

先に言っておくが、これは本じゃない。文字数にすれば本一冊分とは言ったけど、それはあくまでたとえ。これは既に書いて推敲を重ねた紙の束なんかじゃなく、俺のたどたどしい語彙で今リアルタイムで君に送る身の上話。文法がめちゃくちゃだったり、間違った言葉を使ったりするかもしれない。時系列や登場人物を正しく伝えるぐらいは気をつけるつもりだけど、それも百パーセント保障するとはいえない。リアルタイムだから、何が起きるかわからない。ひょっとしたらこの話を最後まで語る前に俺は死んでしまうかもしれない。いや、本心からそう信じているわけではないが、それくらいのことが起きても驚かないでほしいということだ。

こういう不安材料はできれば隠しておきたかったのだけど、まぁいずれはばれることだったろうから仕方ない。さすがに話を作りながらよどみなく違和感なく伝えるのは無理だとわかっていた。コそれくらいはわかっていた。ーヒーを頻繁に飲んだりして時間稼ぎをすることは間違えないから、鋭い君なら、たとえ今伝えなくとも感づいていただろう。

どうせ気づかれるのなら先に伝えておいてよかった、とでも考えておこう。ポジティブシンキングは生きてく上でそこそこ重要だ。一番ではないが、そこそこは重要だ。

では一番は何なのか……　っと、もう無駄話はよそう。俺はこれを無駄話とはまったく思っていなかったりするが、俺だって空気は読める。君のあからさまに面倒そうな感じは伝わっている。だから、これはまた次の機会にでも。ってことにしておこう。

最後にもうひとつ、一方的なお願いばかりしてすまないが、もうひとつだけ頼んでおきたいことがある。とりあえず聞くだけ聞いてみてくれ。

余裕があったらでいい、大変だと思ったらすぐにほっぽりだして

もらってかまわないが、一応お願いしておく。今から語る俺の話、それが何文字だったのか最後に教えてもらえないか？

……そうか。そうだな、いや、これはこちらが悪かった。そんなことをしながら話に集中できるはずもないか。いや、忘れてくれ。君のことを一切考えていない、自分勝手にもほどがある発言だった。

俺が次にこれを語る人へは、せめて文字数ぐらいは教えてやりたかったのだが……　それは自分でどうにかするとしよう。

お待たせした。それじゃあ話そうか。俺の一日、ある年の十二月二十四日を。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6852z/

六塞室《むそくべや》

2011年12月22日23時52分発行